

一人ひとりの個性を互いに受けとめ受け入れていく関係づくり

5歳児つき組担任 堀江 佐智子

1、はじめに

近年の社会環境の変化に伴い、人とのかかわり方において大人の価値観やあり方が大きく変化してきている。「煩わしい付き合い方はしたくない」「自分の居心地の良いかかわりだけを求めていく」など、人とのかかわりが希薄になる傾向が強くなっている。このことは、子どもたちにどのような影響を与えているのだろうか。

本園でも近年の子どもたちの姿から、人とかかわりにおいても、

- ・仲良しの友だちとのつながりを強く求めるが、かかわりが深まったり広がったりしにくい（柔軟に友だちとかかわっていくことができにくい）
- ・自分の思いや考えを受け入れてもらえる友だちとのかかわりを求め、葛藤やトラブルを乗り越えていく経験に乏しい

といった課題を捉えている。これは大人のかかわり方の傾向と大きく共通するものではないだろうか。

上記したような実態を踏まえ、幼稚園の生活の中でよりいろいろな友だちとふれあう経験をさせたいと願って、昨年度より年長進級時に年中時の学級を解体再編成している。つき組の子どもたちも、そのような取り組みのもと、新しい仲間・担任と出会い、スタートした。新しい学級に慣れるまでの間は気持ちの葛藤もあると思うが、いろいろな友だちとふれあう経験の中で

- のびのびと自分らしさを発揮する子ども
 - 自分とは違う考えや思いをもつ友だちの良さを感じ、受けとめていく子ども
- に育ってほしいと願い保育にあたってきている。

ここでは、日々の保育実践を振り返りながら、

- 一人ひとりの個性を互いに受けとめ受け入れていく子ども同士の関係、学級集団を作っていくためにどのような援助や環境の構成のあり方が大切なのかを探ってみたいと思う。

I、実践を通して

以下の記録は、平成13年度5歳児つき組（31名）の4月から3月までの記録の抜粋である。

※実践記録に取り上げた子どもの名前は全て仮名である。

1、実践記録より

記録1

5月中旬

テラスで先に登園してきた **れいな** と **まな** がままごとを始めている。**ゆきこ** が「よせて」と二人のところへやって来る。

れいな「いま、まなちゃんと遊んでいるから一緒に遊べない」

ゆきこ は困った顔をして保育者のところへやってきて自分が仲間に入れてもらえなかったことを話にくる。そこで、保育者は **れいな** 達に「一緒に遊びたい」という **ゆきこ** の気持ちを仲立ちとなって伝えることにした。

まな 「わかった。じゃあ、私が明日れいなちゃんと遊ぶから今日はゆきこちゃんが遊んでいいよ」

別の友だちを求めていこうとする **まな**。

ゆきこ 「うん、ありがと。わかった。れいなちゃん いこ」

と自分が **れいな** と遊べるようになったことを喜びうれしそうにれいなと手をつなぐ。

保育者 「ねえ、まなちゃんは本当にそれでいいの？」

まな 「本当は一緒にあそびたい」

保育者 「じゃあ、3人で楽しく遊ぶことも考えてみたらいいんじゃない」

ゆきこ 「うーんそうだね。まなちゃんもれいなちゃんも、一緒にやろうよ。お母さんとかハムちゃんとかきめて…」

れいな 「いいねえ。やってみよう」と3人で手をつないで遊戯室へ。

しかし、しばらくすると **ゆきこ** がいちご組の部屋で年少児と遊んでいる。

ゆきこ 「今日はね、私が我慢することにきめたんだ。明日、れいなちゃんとあそぶことにしたから…いいんだよ。」と明るく言った。

<感じたこと>

進級したばかりのこの時期、特に仲の良い友だちつまりいつも自分と一対一で向き合ってくれる人を心の寄り所として強く求めていたように思う。また、おもしろいことを見つけていこうとする気持ちよりも、「一緒に」を感じられること安心感を得ることを子どもたちは求めている様だった。担任とのつながりも薄い、この時期はこのような姿から無理につながりを広げていく、かかわらせていくのではなく一人ひとりの気持ちが安定していくよう支えていくことを大切にする必要があると感じた。

記録2

7月中旬

遊戯室で **りの** **ゆか** が積木でおうちを作りハムスターごっこをして遊んでいる。

その横でこの二人の様子を気にしながら、スチームの上に座ってじっとその様子を見ている **とも**。担任がそばに居るのに気付いた **とも** は担任のところにやってきて背中にもたれかかる。

とも の気持ちとしては、担任にこの状況を何とかしてほしいという気持ちもあったと思うがあえてそこにふれず **とも** の動きを見守ることにした。

しばらくすると、**とも** の様子を気にとめた **ゆか** が「ともちゃん、元気がないね。どうした？」とやってくる。**とも** は何も返事をせず、顔をそむける。

担任「ともちゃん、ゆかちゃんが心配しているよ」と声を添えてみるが答えはない。

ゆか はしかたなく、**りの** との遊びにかえっていく。**とも** は **りの** たちに近づいていき、その傍らでボールをつきはじめる。しかし、その様子は、つまらなそうでありこの遊びがしたいからやっているものではないことがわかる。

りの 「ね。元気がないね」担任のほうに同意を求めながら **とも** に声をかける。

「一緒にみんなでハム太郎ごっこしようよ」

とも しっかりと **りの** の手をにぎる。「ボールしよう…」

りな 「ゆかちゃんがハムちゃんになってるよ。なにがいい？」

とも また黙り込み、強く **りの** の手をひっぱる

ゆか 「おーい、おかあさん」その声で **りの** は積木のほうへ戻っていく。

担任 「ともちゃん、りのちゃんもゆかちゃんも一緒にしようっていつてるよ。やってみたら？」

とも 「……。りのちゃんとあそびたい。」

担任 「うん。りのちゃん一緒にしようっていてくれてるよ。」

とも 「ちがうの。りのちゃんと二人がいいの。りのちゃんしか遊べないの」

その言葉を耳にしたりのがやってくる。

りの 「私とがいいの？ゆかちゃんとみんなではだめ？」

とも うなずく。

りの 「う～ん。じゃあ、ゆかちゃんと遊んでから…」

とも 強くうでを引っ張る。

りの 「じゃあ…。わたしともちゃんと遊ぶことにするわ。」

とも 今までの表情と一転し明るい顔で **りの** の手をにぎり「いこう」と外へ出て行く。

<感じたこと>

進級当初から、少しずつではあるが一人ひとりが新しい環境の中での生活になれてきたように担任として感じていた時期ではある。しかし、ともの姿にあるように、なかなか自分から友だちの中へ飛び込んでいけない姿や、ひとりの友だちに強い依存を示す姿に担任として戸惑った。「響き合う」姿を求める以前に、一人ひとりが仲良しの友だちや学級の仲間をどのように感じているのか、また受けとめているのかを見極めながら援助のあり方を探っていく必要があると感じた。

2、学級の課題

いろいろな友だちと柔軟にかかわっていけるようにと願い、学級解体に取り組んでいるが1学期間を共に過ごしていても、

- 仲良しの友だちとのかかわりであっても希薄さを感じたり、それかかわりのもろさが強いこだわりとなってあらわれるといった姿や、
- いろいろな葛藤やトラブルを自分達なりに解決しているように一見みえるが、居心地の良い関係性をできるだ自分の気持ちの葛藤をせずに作り出していこうとしている姿
- 記録1のまなのように自分のありのままの気持ちを思い切ってともだちに表現していくことを遠慮してしまう姿など、友だち同士の関係が広がったり深まったりしない、それぞれが距離感をもったかかわり方をしていることに大きな課題を感じた。また、このような課題は学級の仲間関係の広がりにも大きく影響していると感じた。

3、課題を解決していくために保育の中で大切にしてきたこと

わたしは、上記したような学級の課題から、響き合う仲間・学級集団の素地を育てていくために、次のような援助が大切なのではないかと考え、日々の保育にあたってきた。

<一人ひとりの個性を受けとめ受け入れていく関係を作っていくためのベースとして>

(昨年度の取り組みの気付きより・各論4)

- 保育者が一人ひとりの子どもの個性や持ち味を理解し、認めていくことを大切にする。
(信頼関係づくり)
- ・進級当初は、新しい担任になり子どももなかなか担任との気持ちのつながりが持てずそこからくる不安感も大きいと思う。いろいろな友だちとかかわっていかうとする意欲を育むためには、まずは、保育者と一人ひとりの信頼関係を育ていき、安心して生活をおくっていくことが大切である。また、子どもたちが友だちの持ち味や個性を感じ、受けとめていくためには、保育者自身が一人ひとりの個性や持ち味をしっかりと認め、まるごと受け入れていく姿勢を忘れてはいけないと思う。
- 自分のめあてや願いをもって生活していけるように支える。(自信をもって生活する)

- ・友だちとのかかわりをしっかりとしたものにしていくためには、まず、自分が自信を持って生活に向かっていける力を育てていくことが大切である。そのためにも自分のしたいこと、願いをもって生活に取り組んでいけるよう支えていきたい。自信を持つことによって生活の中で安定感が生まれ、周りに対しても自分をひらいていくことができるのではないかと考える。

<自分とは違う考えや思いをもつ友だちの存在を感じ、受けとめていくために>

(1) 個別的なアプローチとして

○その場面場面でしっかりと相手と向き合う経験をさせていく。

- ・幼稚園の遊びや生活の中は、友だちとかわるきっかけがたくさんある。それだけいろいろな友だちとふれあえる可能性があるということである。しかし、子どもたち一人ひとりが相手に気持ちを向けていこうとしなければ、全くかわりが生まれてこない。それぞれに興味の向け方も、個性も違う子どもたち。誰かが「○○ちゃんと遊びたい」と思っても、相手は全く気付かずに終わってしまうこともあるかもしれない。子どもたちの気持ちが友だちに向けて動いた時を一つ一つ大事につないでいくようにした。

- ・また、記録2の とも のように りの とあそびたい気持ちがあってもそれを自分から相手に伝えていくことが出来ない姿があった。この場合 りの や ゆか がともの様子に目を向け声をかけてくれたことによって、とも の気持ちが表に出ることが出来た。りの や ゆか のように友だちの気持ちや様子を感じる力ももちろん大切であるが、そうでなかった時はどうであろうか。子どもたちにとって、見えない相手の気持ちを感じることはとても難しいことである。そうであるとするならば、相手に自分の気持ちや思いを表現していく力がとても大切である。ありのままの気持ちや感情を相手に伝えることによって大きくかわりが変化していくと思う。保育者は、今のその子の気持ちを伝えたり、その子自身が相手に自分の言葉で、行動で表現していけるよう支えていく必要があると感じた。その時に激しい言葉で伝える、思わず手を振り上げながら乱暴に自分の気持ちを表わす場合もあると思うが、あえて「生」の感情をぶつけ合わせることも大切であると感じている。また、その中でお互いにさまざまな感情を体験することが、次に出会った友だちとのかかわりの場面場面で相手の気持ちを感じていく、受け入れていくことにもつながっていくと考える。

- ・また、トラブル場面においては、安易になかよく遊ぶために折り合いをつけていくことではなく、それぞれが思いや考えを言い合えるようにし、その中で自分は違う考えや思いをもつ友だちの存在に気付いていけるよう支えていくことを大切にしてきた。

☆このような援助を子どもたち同士のかかわりの中で心がけて取り組んできた。

<以下にあげるのは修了が近くなったころの子どもたちの姿である。>

記録3 みんなでしたいんだけど…（1月下旬）

かずや **しゅう** **みみ** **まさや** がリレーをはじめようとい었다。 **かずや** がリーダーシップをとってチームや順番をきめていく。 **かずや** と **しゅう** と **まさや** と **みみ** が同じチームになってみんなでお互いを応援しながらリレーを楽しんでいる。

そこへ、 **りゅう** **しょう** が「よせて」とやってくる。

「いいよ」と快く受け入れる3人。

<そこから、どのチームにはいるか、何番目に走るかでもめごとが起る。>

まさや も **りゅう** も自分のいるチームを勝たせたいため、 **かずや** の決めるチームにはなかなか納得しない。

かずや「じゃあ、一人ずつ走ってみて、何秒かはかってきめる？」

みんな納得して走り出すが、数える早さが違う、途中までしか走ってないなどさまざまな問題が出てくる。

りゅう「そんなんじゃあ、きめられんわ」

まさや「みんなで一緒に走らんとわからんにきまってる」と激しい口調でかずやに思いをぶつけていく。

そこへまた **けん** とほし組の **たろう** がやってくる。

かずや が中心となって、チーム決めにいろいろな考えを提案していく。(まさや→じゃんけん、りゅう→好きな人とする、誕生日の同じ人など)。が、どうしても人数が合わなくなって、(そういうつもりではないが)かずやのチームが多くなってしまふ。人数の合わなさに **りゅう** が「やめる」と言い出し、保育室へ帰っていく。また、 **みみ** も **しゅう** も「つまんない」といってその場から抜けていこうとする。

かずや「ねえ、ちょっと。みんなでしようよ。」「こっちにすればいいじゃん」とみんなとのリレーを成立させようとかんばるが通じていかない。

けん「おまえのいうとおりにばっかに、ならんわ」と **かずや** を叩く。

しゅん「あつ、けんとがたたいた。先生たたいたよ」

けん「だって、かずやばかりが決めてるもん。だけんだわ」といって走っていつてしまふ。

かずや もつまらなそうな顔。自分なりにみんなでする方法を考えているのに上手くいかず

黙り込んでしまう。

担任 「かずやくんがいっぱいいい考え出してたけど、みんなもいろんなこと思ってるんだね。」

みみ 「手、大丈夫？もう一回やる？」

かずや 「……。先生もする？」

担任 「いいよ」

かずや 「じゃあじゃんけんだ」と再びたちあがってリレーに向かい始める。

そこへ **けんた** もかえってくる。「さっきはごめんな」ぶっきらぼうに **かずや** にいう。

かずや 「おまえもするか。俺のチームな。」

考 察

いろいろな友だちとのかかわりが広がり、仲間入りや受け入れが柔軟になってきたその中で、**かずや** のように強引な面もあるが何とかみんなで楽しくリレーができるように考えを出していく姿、また周りの子どもたちもその思いを受けとめやってみようとする姿など友だちと気持ちをぶつけ合いながら何とかみんなで行き届く方法を模索していく姿にかかわる力の育ちを感じる。

保育者は、みんなが辞めるといふとき、**けんた** が **かずや** をたたいて逃げていった時、仲立ちをして向き合わせようとしたが結局はしないでおこうと思った。みんなで楽しく取り組めたという満足感にはつながらなかったが、その過程の中でみんながしっかりと考えたり思いを出し合っていくことが個々のさまざまな感情の体験につながっていた、また友だちの気持ちを感じるという経験をしていると感じたからである。問題を解決する、乗り越えるということはよりよい方向（満足感や充実感）につながるように考えてしまうが、そうでない場合があってもいいと思う。その過程で、それぞれが自分の今精一杯の気持ちや思いを表わしながら人と向き合っていく経験のふくらみを大事にしていかななくてはいけない、そのことが『響き合う』姿、お互いを受けとめ受け入れていく姿へとつながっていくのではないかと感じた。

(2) 1人ひとりを育む学級集団づくりに対するアプローチとして

個と個がつながっている関係がさらに大きく広がっていくとそこに学級集団が見えてくる。上記した個別のアプローチの中で豊かな関係を気付いていくことがよりよい学級集団づくりにもつながっていくだろう。また逆に、その集団が育っていくことによって個々の関係も深まったり広がったりしていく。ここでは1人ひとりを育む学級集団を育てるために大切にしたいことをふりかえてみたい。

○学級みんなで共有する場の中で、いろいろな友だちの存在を感じていけるようにする。

- ・「自分でみつけた遊び」の中では、それぞれの遊びや興味の方向、仲間関係など個と個のつながりでのかかわりが大きく、そこでよりクラスのいろいろな友だちに目を向けたりかかわっていけるよう支えていくためには、学級集団の育ちを見極めながら、学級みんなで集まる場での「内容」を考えていくことが大切であると感じている。

進級当初～

☆みんなで楽しめる遊びやゲームを工夫してとりいれていく。

- ・みんなで一緒に楽しさを味わえるように
- ・いろいろな友だちの存在を感じていけるように

記録4 ゆうちゃんって面白いね

学級の集まりの時に、保育者と子どもたちとで手遊びを楽しんだ。最初は保育者が主体となって投げかけていたが、**ゆうた** がほくもやってみたいというので保育者のしていた投げかけを任せてみた。**ゆうた** は友だちの表情や反応を見つめながら、次々と面白い投げかけをしていく。周りの子どもたちの視線も **ゆうた** に注がれ、**ゆうた** を中心に短時間であるがみんなで楽しさを共有できる場面となった。降園前、**なお** が「先生、ゆうちゃんっておもしろいね。先生より上手だったよ。またやってほしいな」という。

「自分でみつけた遊び」の中では、仲良しの友だちとのかかわりを強く求めていく進級当初、まだクラスの友だちに対する抵抗感も強い。この時期はお互いの心の壁が自然にほぐれていくような遊びやゲームも大切な意味があると改めて感じた。またなおがゆうたの面白さに気付いていたように、直接的に目に見える形で相手の存在を感じさせていくことがいけるようにすることが大切なのではないか。また、進級当初だけでなくこうしたゲームや遊びは、楽しさやスリル感のある中で、自然な形で人とふれあえるものであるので時期時期によって遊びを工夫しながら取り組んでいく必要があると感じている。

☆保育者が心にとめたことや、子どもたちからの話題をみんなで話し合う場を大切にする。

みんなで話し合うということもお互いの親しみの気持ちが薄い時期は、一方通行で終わってしまうこともあるが、一つ的话题を話し合ったり感じたことを伝え合う事によって、一緒に感じあったり、いろいろな友だちの考えを知ることができる。一般的に保育者がついまとめやすいほうへ促してしまいがちであるができるだけ自分の考えや思いを表わしていける場にしていくことが大切なのではないか。

☆仲良しのグループとは異なるかかわりのもてるグループを意図的につくっていく。

13期後半から14期にかけて、「自分でみつけた遊び」の中で「よせて」「〇〇くんてだんご作り上手だから教えてもらおう」といろいろな友だちの場へ加わっていきこうとする姿が広がってきた。この時期よりかかわりを広げたり深めたりしていくきっかけにもつなぐと考えると、にわとり当番のチームをクラスの話し合いによって決めた。「好きな人とする」という考えも出てきたが「それはやめて決めてみよう」と保育者の思いを伝えたところ、誕生月でチームを作ることになった。当初はそれぞれに当番に向かう姿があり、当番をしていてもなんとなくぎこちなさも感じたが、徐々にかかわりがスムーズになってきた。また、3学期中旬になると、当番グループのつながりが「自分でみつけた遊び」の中でも自然にみられるようになってきた。この意図的なグループでのつながりが、遊びや生活の中で今あるグループ同士をつなげたり、広げたりしていくきっかけにもなることを改めて感じた。また、その時に保育者がメンバーを構成する場合もあると思うが、全てを保育者が決めるのではなく、学級集団の「期」や「機」を捉えて子ども達と一緒にどのようにグループをつくっていくのかを話し合うことも大切なことであると感じた。そのことは、そのあとの仲間関係の広がりや深まりにおいても影響をしてくるように思える。

Ⅲ おわりに

一人ひとりの個性を受けとめ受け入れていく子どもたち同士の関係を育てていくためには…

4月にであった31名の子どもたちとの生活の中で、人とかかわっていくということ、その中で「響き合う」とはどういうことなのかを模索しながら過ごした一年であった。学級の中に「いろいろな友だち・人がいる」という状況は何もしなくても子どもたちは感じ取れるであろう。しかし、その状況を意味のあるもの、自分と友だちの存在（個性・持ち味）とが出会うことができるような場や環境にしていくことが保育者に求められているように思う。

私は日々の保育の中で、互いを受けとめ、受け入れていく関係を作っていくために『相手と向き合う』という経験を大事にしたいと考えて子ども達の姿を支えてきた。少しずつではあるが、自分の気持ちを相手に伝えていく姿や相手の考えや思いを感じ取っていきこうとする姿も見られるようになってきている。子どもたちの姿を通して、最終的には「響き合う」姿つまり、それぞれの持ち味や個性を受け入れながら遊びや生活を作り出していくことのできる仲間になってほしいと願っている。しかし、記録3の子どもたちの姿でもあるように、楽しさを感じながら「みんなでリレーをする」とことはできなかったけれども、お互いの考えがぶつかり合い、問題を解決していきこうとする過程の中で、一人ひとりが精一杯友だちと向き合っていくことができたなら、それが「響き合う」ということの第一歩になるのではないかと思っている。

今後も、子どもたち一人ひとりが友だちの個性や持ち味を受けとめ受け入れていく関係を育てていくためにはどのような援助や環境の構成のあり方が大切なのかを考えながら保育にあたっていきたいと思う。